

語彙（理論・現代）

一

初めに私事にわたって申し訳ないが、筆者は昭和五十七年二月、北京大学に招かれて一年間中国で過ごした。さて、任を終え、帰国してまず感じたことは、その間に出版された講座類、雑誌の特集号、単行本に語彙関係のものが何と多いことかということであった。五十七年十一月に創刊された月刊誌『日本語学』（明治書院）はまづ先に「語の意味」を取り上げているし、同じ明治書院から『講座日本語の語彙』全十二巻、別巻1も刊行された。語彙の分野が一そろいの講座として登場する。これはまさに驚異であった。どうしてこうまでこの一、二年、語彙研究が脚光を浴びるようになったのか。これをひとくく鍵は、前期から今期にかけて研究書や諸論文の中で展開された語彙研究、特に意味研究にあると思われる。結論を先に言えば、意味研究が語義研究の範囲にとどまらず、句や文の意味として日本語の文法を支配していることを突き止めたからにはかからない。もちろんこのような予想や仮説的意見は以前から立てられていたことであるが、実証的な形で断片的にはあるが報告されなかったことが日本語研究者や学界の関心を高めることになったこと

は確かである。まだ限られた語群にしか研究の手が届いていないことと、文法研究そのものと直結した語彙論・意味論として体系の整うまでには至っていないが、来期への成長と発展が確実に期待される分野と目されていることは間違いない。このことは、語彙研究、特に意味研究が発展途上の段階で、むしろその成果が将来に期待される揺籃期であることを意味してはいないか。それだからこそ今ここで大事に育てて行かねばならぬ思いやりが研究者側にも出版社側にも働いている、とそう筆者には感じられるのである。昭和五十七、五十八年の今期は、まさに語彙・意味関係の研究に対して、比喩的に言えば、前年にも増して語彙予算の付いた年であったと言える。

二

語彙を言語の資産的なものと考え、言語表現に果たす機能面の問題よりも、むしろ量的な面でその語彙量や語彙の片寄りを考える傾向が以前は強かった。そうした過去に発表された統計資料を再収録したものとして林大監修『図説日本語』（角川書店、昭57・2）が出された。全体を「語彙／文字と表記／文法と文体」など八分野に分

森田良行

けているが、実に語彙項目は一五八ページを費して他の分野を圧倒している。これは何も語彙問題がそれだけ重視されているということではない。語彙関係は、量や比率、片寄りといった、数値で表せる客観的特徴の出しやすい分野で、従来はそうした面での調査が先行していたことのおかげである。今期も、国研報告76として『高校教科書の語彙調査』(秀英出版、昭58・3)が出された。これは昭和四十九年度に着手した調査の報告というから、すでに十年の歳月を要している。理科・社会方面の教科書を資料としているので、高校生其自然・社会科学系の学習語彙の実態がこれでわかるというわけである。従来は、大阪外大研究留学生別科で出した「留学生教育のための基本語彙表」(『日本語・日本文化2』所収)などで一応のこととはつかめたのであるが、今回の国研報告によって詳しい頻度調査の結果が明らかにされた。今後この報告をどのように利用していくか(たとえば外国人留学生のための必要専門語彙として活用するなど)が課題として残る。語彙調査は、集計結果だけでは資料的価値しか持たない。いかに言語生活や教育、研究の場に役立てていくかが課せられた宿命であるが、今期は日本語教育の分野で二つの報告が見られた。一つは同じ国研の『日本語教育指導参考書9』として『日本語教育基本語彙七種比較対照表』(昭57・3)である。これは過去に発刊された七種の基本語彙表と二種の資料集をもとに、収録されている総ての語を五十音順に配列対照させたもので、便利なものである。このような地道な作業により、日本語教育という限定はあるにせよ、日本語の基本語彙なるものを考察する手だてとしてよき参考資料を提供したことになる(なお、雑誌『日本語学』は昭和五十九年二月号で「基本語彙」に関する特集を組んでいる)。もう

一点は、文化庁に設置された「外国人の日本語能力に関する調査研究協力者会議」において示された報告『外国人留学生の日本語能力の標準と測定(試案)』に関する調査研究について(昭57・2)である。この中に収められた語彙標準表は、第一水準(三、六二一語)第二水準(一、五四六語)に段階分けされ、五十音順に配列してある。第一水準は表現理解語彙、第二水準は理解語彙として選定されたものである。

ところで、これら諸家が示した基本語彙表を突き合わせてみると、案外その食い違いが大きい。これがたとえば基本漢字や基本とする文法事項であれば、これほどのずれは起こらぬであろう。四万語ほどの語彙量のうち五千語ほどを選ぶ作業がいかに困難なものか改めて思い知らされる。その意味で、基本語彙選定の基準をどこに置くかの研究が要請されるのであるが、これには、(1)平均的日本人の語彙獲得の在り方に拠り所を求める立場と、(2)語を意味との関係で眺め、概念内容から言語生活における必要度・重要度を割り出す立場、(3)表現機能の面から、その果す役割りの重要度を決めていく立場などがある。

初めの(1)語彙獲得の在り方については幼児語の研究が参考になる。このテーマでは大久保愛「幼児語」(『講座日本語の語彙1』、昭57・7)に研究の現状も踏まえて手際よくまとめられているが、資料を提供する研究としては前田富禎・前田紀代子『幼児の語彙発達の研究』(武蔵野書院、昭58・12)が出た。ここで著者は「語彙の体系とは何か、語彙発達をどのように研究すべきかについての考え方が明確になっていない現在、語彙の体系についての考え方を示し、それによって、実際に幼児の語彙発達の研究方法を實踐してみ

ることが大事だと考えている」と述べ(序)、章を分けて細かく記述している。幼児語の種類や実態よりも、量的増加の問題や個別言語の記録を通して伺える著者の考え方に引かれる点が多い。実践的な観察記述にはまず観察者の語彙体系や分類に対する考え方が基本となることを教えている。その意味で、(2)語彙を意味との関係で体系的にとらえ再編成する仕事が出て来るわけだが、この分野の理論的研究は意外と乏しい。林四郎「基本語彙——その構造観——」『講座日本語の語彙1』は、中国語の漢字分類や江戸国学者の語彙分類を拠り所に「実、虚、虚実、助」の四分類を行い、これを「語ノ辞」に当てはめて八分類とするなど、極めて示唆に富んだ意見と試みを提示している。荻野綱男「シソーラスについて」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究5』、昭58・12は計算機用シソーラスとして、その在り方と作成法を追究したものであるが、言語を離れた概念体系、特に概念の上下関係にもとづく理論的な分類体系を基準にしても、現実の特定言語の意味分野をもとにした語彙体系を基準にしても、語彙の分類作業は同じ結果になると言い切る。概念の分類というシソーラスの段階では、文脈による分類、特に他語との共起関係や選択制限ならびに連語構成等の要素を適用することは可能だが、そうすることがシソーラスの役目ではないのだとも主張している。これではわざわざ日本語の語彙特徴や語性を研究して分類基準を設ける必要などなくなってしまふ。その点『朝倉日本語新講座2』「語彙」(昭58・4)では共起現象も積極的に取り上げ、文法や文章表現に結び付けて語彙の問題をとらえていくという前向きな理論が展開されている。さらに柴田武・石毛直道編『食のことば』(ドメス出版、昭58・11)のように、名詞、動詞、形容詞に限るが、食

に関する語彙が互いに関係しあうさまを追い、食語彙体系と日本の食文化との結びつきを照射するという画期的な試みがなされている。語彙問題は意味・表現を離れて論ずることはできず、結局は言語生活・言語社会の問題へと発展し、最終的には文化の問題にまで行きつくことを教えている。語彙研究も、狭くは文法・表現に発展し、広くは社会・文化へと結びつく研究の哲学が必要なることを明らかにした時代と言っている。

講座類ではこの問題に対しては極めて敏感で積極的な態度が見られた。『講座日本語の語彙』は第二巻で、佐藤喜代治「日本文化と日本語の語彙」渡辺友左「日本の社会階層と語彙」江川清「日本社会における場面と語彙」芳賀綏「日本人の言語行動と語彙」を、第一巻で、島田英雄「位相論」等の論文を掲げ、文化・社会・言語生活などさまざまな角度から光を当てて語彙問題を論じた。

三

語彙研究は意味論の重要な一領域であるが語彙研究はすでに語の範囲を超えて文法・表現の領域にまで広がりは始めている。

雑誌『日本語学』が昭和五十七年十一月に創刊されたが、まっ先に「語の意味」を特集し、「私の意味論」として國廣哲彌、柴田武、水谷静夫、宮地裕の諸家の論文を冒頭に掲げている。ここで水谷氏は「△意義素性△と称する類いのラベルをべたべたと貼る程度のラベル貼り意味論では、何程の仕事も出来まい。また、さういふ方法だけが意味論の客観化でもない」と述べ、宮地氏は「意味」は言語の単位体の「語・文・文章談話」などが持つものであって、語だけのものではないから、意味論は語の意味論(語義論と言えよう)

だけではない。まして、意味論即語彙論ではありえない」云々と主張する。それに呼応するかのように柴田氏は「私の意味論は語義の段階にとどまっている。文の意味、文章の意味には踏み込んでいない。私が意味論について述べられないのはそのためである」と言い、期せずして三氏が、意味論の主流が語義研究の範囲にとどまる現状に警鐘を鳴らしている。個々の語を取り上げた語義研究は相変わらず花盛りであるが、いずれも語義分析の範囲を超えていない。國廣哲彌編『ことばの意味』3 辞書に書いてないこと(平凡社、昭57・5)は柴田武編の二巻を受け継いで三十一項目の類義語グループを取り上げているが、今回初めて動詞のワクを取り払って形容詞・副詞・名詞その他が取り上げられた。意味分析の方法に普遍性を与えるためには各種語彙に検証される必要があるが、それが行われ出したところで『ことばの意味』シリーズが終了というのは残念である。方法論的な発展を今後期待しただけに心残りの気がする。

この方法論を取り入れたものとして東京都立大学日本語研究会は「特集・類義語の意味論的研究」の第五号を刊行し(『日本語研究』5、昭57・12) 東京大学言語学研究室では國廣哲彌編『意味分析』(昭58・6)を発刊した。前者は動詞グループ七項目、後者はその他の品詞群も含めて二十四項目の類義語グループの分析を行っている。『ことばの意味』シリーズの方法論を受け継ぐ研究は国内にのみとどまらない。中華人民共和国での日本語学習人口は大変な数にのぼるが、ここでも多くの日本語研究者が類義語研究に取り組んでいる。たとえば北京对外贸易学院『日語学習与研究』(隔月刊)では毎号類義語研究を載せているが、日本人の場合と違って、誤用研究を目的として行われるため、類義語同士の共有する文脈、非共有の

文脈という観点から比較がなされる。意義素の抽出記述が問題ではない。そのためかえて文レベルでの語義研究への道が開かれる可能性を秘めているのであるが、これら外国人の研究成果にもっと目を向けるべきではなからうか。同様の意味で、たとえば荒川清秀・劉青然「中国語動詞の意味記述」(『愛知大学文学会文学論叢』68、昭57・1)、大谷雅夫「『吹』と『ふく』——和習の背景——」(『大谷女子大國文』13、昭58・2)など、日本人の外国語研究や漢文研究などの成果にも関心を向けた。認識心理学やパーリン・ケイの普遍論の仮説を拠り所に日本語の基礎色彩語彙の構造を調査分析した執行一介「色彩語彙と意味の普遍性」(人文論集『現代思想』6、昭58・3)等も国語学からはみ出した研究として注目する必要がある。

語義分析・記述の在り方を考える場合、一つは現行辞書の語義解説の検討を通して方法論の不備を知り、新たな道を模索する実用的立場と、純理論的に意味分析の方法を構築する学問的立場とがある。前者に杉本つとむ『国語辞書を読む』(開拓社、昭57・3)があり、各種辞典を組上らせて語義解説の良否を論じている。が、どうしてもこの種の研究は次元の低い欠点の指摘にとどまり、方法論の建設には結びつきにくい。そこで後者の、学問的立場から意味分析の方法を理論的に支える研究が要請されるわけであるが、理論的根拠が国語学の領域から出発するか、西欧言語学に端を発するかで二種に分かれる。今期は後者の分野からの大きな成果として國廣哲彌「意味論の方法」(大修館、昭57・2)が出た。この書については、すでに本誌一三五集で長嶋善郎氏による詳しい書評がなされているので紹介は省くが、国語学出身の者から見ると、言語学者である著者の意見には承服しかねる点も多々ある。特に西欧言語学、英

語の実態を踏まえた論の展開はついて行けないところが多い。たとえば、同音異義と多義の現象を連続したものと考える問題、意味分析において語源を考慮対象からはずす問題など挙げればきりがなが、日本語が和文系語彙と漢文訓読系語彙の並立という長い歴史と、近代漢語の流入増加による複雑な語彙体系を呈している現状や、語と文法とのからみ合いが、屈折語である印欧語とは本質的に異なるところから生ずる造語性の差や語構成の違いを考えると、著者のようにあっさり言い切ることが可能かどうか。やはり長い日本語の語彙史をひもといてみなければ結論できぬ問題だと思われる。

語源というよりはむしろ歴史的な流れの中で語構成の成立をとらえ、意味変化を跡づけることは、その語の現在の意味や用法を知る上で、日本語では極めて有効な手段たり得る。少なくともその作業が多くの語において可能であり、そうしなければその語に対する正しい認識が得にくい性質を日本語は持っている。直観や内省、共時的な現代語同士の例文中心の類義語の比較だけでは思わぬ誤りを犯すことも多い。その語の日本語独自の対象把握の在り方や、語義を支えることばの歴史的・文化的背景に目をふさぐことにもなりかねない。このように考えると、日本語意味論は日本語の本質に合った理論体系として国語学の中からも生まれる必要のあることを感じさせる。その意味で語彙・語義の歴史的研究はなおざりにできない。本稿の分担範囲を越えてしまうが、『講座日本語学』は第四卷に「語彙史(昭57・1)」を組み、語種別・分野別にその史の変遷上の諸問題を論じている。また『講座日本語の語彙』は九、十、十一の三巻を「語誌」に当て、五十音順辞書形式に二二三項目の見出しを立てて、その語の歴史を概観する。国語辞典・古語辞典を超える内容で

はあるが、史的記述にとどまり、現代語の意味分析・記述の方法へと発展する研究の哲学に欠けるところに問題が残る。ただ一例(『おりのり』斎藤倫明氏担当)だけは『ことばの意味』シリーズ方式の分析記述で語誌項目としての異和感を持つが、くしくも旧来の学問と新興の学問との対照と断絶がここに見られる。

主として言語学の領域から築き上げつつある現代語の意味論と、国語学の領域において整えられた語義の史的研究とが、目下のところ全く性格の異なる学問として独立している。両者をドッキングさせる研究者の目と方法論は今のところ現れていないかに見える。田山のり子「現代日本語における『ところ』——その意味と用法——」(『国語学研究と資料』6、昭57・7)は、語の意味を折り畳まれた一枚の屏風にたとえ、屏風の各面(意味枝)は一面一面異なる絵であって、同時に全面で一つの全体を形づくっていると述べたが、各派主義の生ずる流れを発想の展開としてとらえるか、歴史的に眺めるかで意味論的方法と史的研究との差が生ずるにすぎない。両者を同じ理論的立場で統一することも夢ではない。

ある限られた語彙の意味について論じたものとしては、外来語を原語と比較した石綿敏雄『外来語と英語の谷間』(秋山書店、昭58・8)言葉の意味の逆転に触れた片山朝雄『ゆれ動く言葉と新聞』(南雲堂、昭58・10)などがあり、傾聴すべき意見が多い。

四

語の範囲を超えた意味研究としては、まず句・文を対象とする意味研究が考えられるが、句結合の度合の高い慣用句の意味研究として宮地裕編『慣用句の意味と用法』(明治書院、昭57・10)が出た。

氏は過去にも成句に関する一連の研究があり、今期も「動詞慣用句」(『日本語教育47』、昭57・6)などが見られたが、右の『慣用句の意味と用法』は辞書形式に慣用句を並べたところは一般慣用句辞典と変わらないが、英、中、フランス、韓、タイの五か国語の例と対照させている点、異色である。卷末解説で慣用句の定義・分類・特徴などを論じているが、語結合の制約や結合度の高い傾向にある事例を、慣用句のワク内にとどめず、その慣用句を含む文にまで範囲を広げて論じている点、新しさを感ずる。語の意味を、語のワクを越えて句の意味・文の意味へと広げようとするとき第一に考えられることは、語同士の共起・非共起現象、その「意味」の直接的繋がりが強まれば結合価の問題へと発展する。この現象は、主述関係や修飾関係、目的語と動詞との関係などで特に目立つが、修飾を職能とする副詞は比較的取り組みやすい。今期も工藤浩「叙法副詞の意味と機能——その記述方法をもとめて——」(国研報告71「研究報告集3」、昭57・3)「精力的に副詞を追究する小矢野哲夫「副詞の意味記述について——方法と実態——」(『日本語・日本文化』11、昭57・3)同「副詞の呼応——誘導副詞と誘導形の一例——」(渡辺実編「副用語の研究」明治書院、昭58・10)など意味論から文法論への飛躍の可能性を秘めた意欲的な研究が発表された。仁田義雄「結果の副詞とその周辺」(『副用語の研究』所収)同「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」(『日本語学2—10』、昭58・10)などは、すでに文法論へと移行した段階の研究と見られ、文の意味論(文義論)→文法論の連続性が副詞研究の段階では実証されつつあると見ている。そこで、これらは「語彙」をタイトルとする本稿の領域をはずれることとなる。

意味論の範囲を語から文へと広げることによって、意味と文法と

は同じ土俵上に立つこととなり、文法論は広義の意味論と表裏の関係となる。文法分析の方法論と文の意味分析の方法論とが二つ目玉ではなく、一つに焦点が合っていく方向へと進むのが自然の成り行きである。実際的な立場から文法と意味の関係や問題を論じたものとして、仁田義雄「語彙と文法」(『講座日本語の語彙1』、昭57・7)草薙裕「テンス・アスペクトの文法と意味」(『朝倉日本語新講座3』、昭58・9)や雑誌『日本語学2—12』特集「意味と構文」(昭58・12)所載の諸論文——特に動詞の意味と文法の問題に触れた論として、石綿敏雄「機械翻訳における意味と構文」村木新次郎「単語の意味と文法現象」などが見られた。村木氏にはほかに「単語の意味と文法表現」(『国研報告74』)や「機能動詞の記述」(『国文学・解釈と鑑賞67』)など動詞に関する意味論的な文法現象を扱った示唆的な論文が多いが(したがって本稿の取扱い範囲を越える論考であるが)、副詞について動詞も、意味と文法の両面工作のしやすい語群と言ってよからう。仁田義雄「再帰動詞、再帰用法——Lexical-grammaticalの姿勢から——」(『日本語教育47』、昭57・6)西尾寅弥「自動詞と他動詞——対応するものではないもの——」(同右)などは、従来は文法領域とも考えられていたテーマを取り上げたものであるが、意味論に跨る比重のほうが遥かに大きい。これら二作にも扱われていることだが、動詞は、文中で示すその語のヴォイス、アスペクト、テンスなどの性格によって意味的にもさまざまな様相を呈するものである。

一方、格支配によって意味と文法とが関係しあう。言語学研究会編『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房、昭58・5)は各格に立つ名詞と動詞の組み合わせを豊富な資料によって分類例示したもので、日本語動詞が名詞と結合関係を結ぶときの選択制限を具体的に

まとめた功績は大きい。結合価に触れたものとしては『朝倉日本語新講座3 文法と意味I』(朝倉書店、昭58・9)中の石綿敏雄・荻野孝野「結合価から見た日本文法」があり、巻末附録「日本語用言の結合価」がある。後者は一、一五三語の用言がそれぞれ述語に立つ文の構造タイプ(文型)を記号式で表したものである。残念なことに、それぞれの語がその特定パターンを取ることによって意味的にどう変容するかは示されていない。

語(句)結合を統語論的に見るのは文法論の立場であろう。意味論的結合価を考えることによって、文法・意味の双方が手を結ぶ。その点、動詞の結合価に関して、各格に立つ名詞の語彙的意味や範疇の意味を積極的に考慮して論じた村木新次郎「動詞の結合能力をめぐって」『日本語教育47』、昭57・6)さらに、それによって生ずる動詞の意味の階層性を取り上げた森田良行「日本語動詞の『意味』について」(同右)などは、意味論的立場でとらえた文法現象と言えよう。

意味の問題は現在、副詞と動詞において文法領域と結び付いている。体言は動詞との結合関係として研究され、それが語彙体系(特に意味分類)の問題にまで波及しそうな気配である。意味論と文法論とが別々に掘り進めて来たトンネルが今、副詞・動詞・形容詞あたりで(まだ、ごく限られた語例にすぎないが)ぼつぼつ繋がり開通し始めてきた。ただ、これは双方の接点に近い先端的・先駆的仕事をしている限られた研究においてであって、すべての語彙研究が現在そうだというわけではない。そうだからこそ、このような時期に、各語についてなされた過去の研究文献リスト、佐藤喜代治編『語彙研究文献語別目録』(『講座日本語の語彙・別巻』、昭58・11)

が刊行されたのは意義あることであった。意味論は語彙の範囲を超えて文の意味へと広がっていく雲行きにある。意味論と文法論の接点はすでに点から重なりへと移行し始め、両者は部分的に地続きとなりつつある。意味論的文法研究と文法論的意味研究とが統一理論によって合体することが望ましく、さらに言えば、意味論が「文」のワクを越えて文章談話の意味へと発展し、文章論とも地続きとなることを、将来への課題として夢を抱かせた年でもあった。ともあれ、現状では、意義素論に向く目と文型論に向いている目とが一体化することが望ましいが(同時に、語彙史に向いている目も)、それは次の二年ないしは、そのまた次を加えた四年間を待たねばならぬ。その時には、本特集のような「語彙(理論・現代)」を、他から切り離され孤立した島宇宙のように、垣で仕切った範囲として扱うことは困難となるであろう。

——早稲田大学教授——